

## 知的財産の世界に一步を踏み出した皆さんへ

知的財産の世界における高い志を遂げるための一步を、大学院あるいは社会に向けて踏み出した皆さんに、知的財産の教育と研究に携わる者として心よりお祝い申し上げます。

皆さんが新たな未来を拓き始めた今、ささやかなメッセージを贈りたいと思います。

振り返れば、わが国の知的財産領域の歴史は、1990年代の後半を境に大きく転換しました。いわゆるバブル経済が崩壊し、終わりの見えない景気低迷の中で、2002年の知的財産戦略会議開催以降、知的財産が国家戦略とされ、「知的財産立国」なる言葉が生まれました。そして、プロパテントの大きな潮流の中で、立法府による法改正と、司法および行政の各領域における制度・運用の劇的な変化が生じました。民間セクターにおいても、経営効率化追求の努力が継続され、戦略的知的財産マネジメントの創意工夫が試みられています。

私自身、この間に産業界、官界および学界の各領域に身を置き、企業内の特許マネジメント、特許・意匠の審査および法律改正など、多くの有意義な経験を重ねることができました。それぞれの領域における諸先輩のご指導と、理想高き同僚に恵まれたおかげであると信じるところです。

このような流れを経て私が2005年に知的財産系大学院の教員となってから、早くも7回目の春を迎えました。例年、大学院への入学者を迎えるたびに私の胸に去来する思いは、人間の知恵と進歩に対する畏敬の念であり、その知恵の産物たる見えざる資産——知的財産(知財)——の限りなき可能性であり、そして、知財マネジメントを意欲的な院生と共に探求できる喜びでした。

しかし今、私の眼前には、想定外の自然現象によって失われた生命と引き裂かれた文明の残骸が、また、イノベーションの成果が人間の制御を拒む姿があり、私の胸中には、進歩したテクノロジーが生み出した放射線の見えざる恐怖と、不十分なマネジメントへの悔恨が渦巻いています。

このような状況の中で、教育に携わる者の一人として何をなすべきか、また、何ができるのか、3月11日の震災発生から考え続けてきました。私がこれから述べることは、被災地の悲惨な現状とかけ離れた空論に映るかもしれません。しかしながら、私が今なすべきこと、かつ、できることの一つとして、皆さんに以下のメッセージを伝えたいと思います。

皆さんは、なぜ知財の世界に足を踏み出したのでしょうか。大学院に入学した方は、知財マネジメントの知識とスキルを身につけるため、あるいは専門家として知財業務に携わる準備など、様々な学びの目的があることでしょう。そして、社会に足を踏み出した方は、それらの知識、スキルを活かして高度な業務を遂行するという理想に燃えていることと思います。社会に出ても多くの方が、学ぶ意欲を失っていないものと信じるところです。一般に学びには終わりがいいことは言うまでもありませんが、動きの速い世界経済と各領域におけるイノベーションを反映し、とりわけ知財の領域では日々、学ぶべき新たな知識やスキルが生まれ出され、増大しているからです。

私は、そのような知財領域での学びを継続するにあたり、「視野の拡張」にも注意を払ってほしいと願っています。知財マネジメントはしばしば、企業が競争力を高め、持続的発展を追求するための方策であると認識されます。この認識は、かつての好況時には的を射ていました。バブル経済が崩壊した後も、また、いわゆる失われた 10 年の後にさらに襲ってきたリーマンショックによる大不況下においても、妥当性を失っていませんでした。

しかし、今回の大震災を経た我が国においては、知財マネジメントの意義に、大きな一項目が加わったものと考えています。知財マネジメントの目標を、たとえば、一企業の競争力を高め、利益を生み出すというレベルに設定することは合理的ではありますが、より大きな使命ありはしないか、今一度考えていただきたいのです。

皆さんが知財の領域に足を踏み出した意義を、それぞれの個人的な目的、理想を基礎としつつも、知財マネジメントによる「国の復興」を実現する人材として活躍することにある、と捉えてほしいと思います。そのためにも皆さんには、人間の知恵をより高い目標のために、より広い領域において活用することを期待したいと考えています。

なるほど、営利企業に所属する身では、組織の利害を超えた理想を追求することは困難であり、知財の専門家であれば、社会貢献の抽象論よりも、専門性を活かした具体的課題の検討を求められる局面が多いことでしょう。だからこそ心の隅に、我が国の復興のために知財人材ができることへの探究心の炎をともし続けていただきたいと思うのです。

この 3 月に私が身を置く大学院を修了した者の中に、過酷な状況における経験と知識を買われ、被災地での対応を政府に助言するために現地に飛んだ者がいます。いわば、知財の体現者として、任務を与えられたのです。使命感に満ちたその言動を我がことのように誇らしく感じたものですが、彼はその使命を果たすために、修了証書授与式への出席が叶わないものとなりました。講義や海外での学術交流を経て、教学共に成長した、充実の 2 年間で締めくくるはずの式典でした。一瞬だけ彼の顔に現れた悔しさの表情を、私は一生忘れないことでしょう。

皆さんが知財の領域に踏み出した今の一步は、それに続く人生をこの領域で飛躍させるための自由を獲得したことを意味しています。知財領域におけるこれからの人生をどうマネジメントするかは、皆さん一人ひとりの志にかかっています。今、知財人材の一人として何をなすべきか、ぜひ自己と社会を直視していただきたいと思います。そして、この大震災の直後に立てたその決意を共有し、実現しようではありませんか。知財領域ですでに活躍し、皆さんを迎える立場の誰一人として、皆さんの理想実現の努力に手を貸さない者はいないと信じます。

かつて、私が故郷を旅立つ際に、父から贈られた言葉があります。人間として生まれた以上、困難が予測されようとも有意義な道を選んで歩め、とのメッセージであると理解しています。

「男子は須く巖頭に悍馬を立たしむべし」 ——江藤新平

大震災の悲惨な被害状況の全貌すら把握できず、わが国の復興の道筋も見えていない今、知財の領域に新たな一步を踏み出したことの意義を共に考えようではありませんか。そして、被災地で苦しむ人々のためにも、私たちの知恵を振り絞り、生み出された知財を手に共に行動を起こしましょう。

本稿をここまで読んで下さった皆さんが、知財人材として、わが国復興の礎となることを期待しています。

2011 年卯月

神楽坂下の桜散る中、大震災を憂う

東京理科大学大学院 イノベーション研究科 知的財産戦略専攻 准教授  
東和知的財産研究所 所長  
鈴木公明